【ノート】 大学入試研究ジャーナル第 30 号，242-247，2020.

推薦入試合格者へのインタビュー調査

――九州大学共創学部を例に――

翁 文静，立脇 洋介（九州大学）[1)]

九州大学で新設された共創学部の推薦入試合格者を対象にインタビュー調査を行い，①合格者の特徴，②高校における指導と対策，③推薦入試に対する評価を検証した。その結果，①推薦入試合格者は勉学以外の活動にも取り組んでおり，しっかり考える人が多かった。②ほとんどの高校では，複数の先生が多大な時間とエネルギーを割き，合格者をサポートしていた。③推薦入試に対して，合格者や高校の先生は概ねポジティブに評価していた。

キーワード：選抜方法，推薦入試，多面的・総合的評価

1 はじめに

1.1 九州大学共創学部

九州大学では，2018 年 4 月に 50 年ぶりの新設学部となる共創学部を設置した。共創学部は，多様な人々との協働から異なる観点や学問的な知見の融合を図り，共に構想し，連携して新たなものを創造する「共創」をコンセプトとしている。多くの学部は専門性を高める教育が中心であるのに対し，共創学部は文理を融合し，「何をしたいから何を学ぶ」という課題解決型の教育を目指している。

1.2 共創学部の入試の概要

このような従来と異なる教育を実施するために「知識を問う入試から，能力を見極める入試への転換」をキーワードに，他の学部とは異なる入試を導入した。例えば，大学において学びたい内容を重視しているため，全ての入試で「志望理由書」の提出を求めた。さらに，多様な人材を獲得するため，AO 入試，推薦入試，一般入試，国際型入試の四つのタイプの入試を導入した。各入試のポイントを簡単に説明する。

① AO 入試：九州大学で行われてきた 21 世紀プログラム AO 入試をベースにしている。書類による一次審査の後，講義に関するレポート，集団討論，小論文，面接を二日間で実施し，評価する。

②推薦入試：高等学校長の推薦が必要である。活動歴報告書では，高校での正課における学習活動を高く評価する。センター試験は国語，数学，英語の三教科。

③一般入試：幅広い分野の基礎知識と思考力を求める。センター試験は社会と理科から三科目を選択する。個別学力検査では，数学，英語，小論文を課す。

④国際型入試：帰国子女，外国人留学生を対象とする。学力は日本留学試験や SAT などの共通試験または個別試験によって評価する。さらに，面接，志望理由書によって求める学生像と合致しているかを判定する。

各入試で課される試験をまとめた結果を表 1 に示す。九州大学では，AO 入試を行っている学部は多いものの，推薦入試は 10 年ほど実施されてこなかった。そのため，推薦入試の設計にあたり，コンセプトや実施方法について議論を重ねた。しかし，AO 入試と推薦入試では，活動歴や面接を評価するなど，試験内容に共通点も見られ，各入試で求める人材が獲得できたか，検証が必要である。

2 推薦入試に関する先行研究

上記の問題意識に関連する先行研究を紹介する。

中部地区の教育産業関係者である風間（2013）は高校教員へのインタビューに基づき，推薦入試合格者の特徴，高校における指導の様子，推薦入試の魅力や課題などについて報告している。具体的に，推薦入試合格者の特徴は，高校における課外活動や就業経験などを持つこと，大学入学後，部活動などで周囲を引っ張ることなどである。高校における指導に関して，風間は「小論文対策や面接指導も各学校で行なっている」と述べている。また，推薦入試の魅力や課題について，「（高校の）先生方が推薦入試の魅力の一つと感じているのは、本当に箸にも棒にもかからないような生徒が，面接対策をきっかけに，スイッチが入って、劇的に成長していくこと」，「実施時期，学力保証，合格基準，この三つが，今後推薦入試のあり方を検討する際のポイントだ」と指摘している。

大谷（2009）は，高校が大学入試の多様化に対応するため，進路指導をどのように変容させてきたのか

を探るために,高校（A 県 12 校）の『進路指導資料』の内容の変化について検討した結果を，以下の三点にまとめている。第一に,「従来，教科指導に重点に置き，一般入試を主体に進路指導を展開してきた学校でも，推薦 /AO 入試の存在はすでに無視できなくなっており，様々な影響を与えている」。第二に,「伝統的な進学校においても，表だって推薦 /AO の存在を生徒に示すことには積極的ではないものの，第一志望の受験機会が増えるとして個々の生徒に対して選択的に受験を進める傾向が認められた」。第三に,「中堅の進学重視校では高校間の序列構造からの脱却を目指し，推薦 /AO を学校全体として積極的に活用する事例も見られた」。

松井（2017）は，筑波大学理工学群化学類で実施される推薦入試と AO 入試を取り上げ，それぞれの試験内容・特徴と実施結果などを検討している。その結果，推薦入試では思考力や発想力に富んだ真面目な学生が入学するのに対し，AO 入試ではより自主性に富んだ学生が入学する傾向が見られた。

このように推薦入試に関する先行研究の内容は,「合格者の特徴」「高校における指導と対策」「推薦入試に対する評価」に分けることができる。研究の手法としては，高校の資料や大学の入試データの分析，高校教員へのインタビューなどが行われていた。そのため，受験生自身が受験経験をどのようにとらえているのかは検討されていない。高校や大学の教員と受験生とでは，高校における指導や入試に対する評価が異なる可能性が考えられる。

3 目的

本稿は合格者自身が，九州大学共創学部の推薦入試をどのようにとらえているのかを検証する。そのために推薦入試の合格者にインタビュー調査を実施し，合格者の特徴をあぶりだし（5.1），合格者の出身高校における指導と対策の実態を把握し（5.2），合格者及び出身高校の推薦入試に対する評価を明らかにする（5.3）。

4 方法

第一筆者が該当者である平成 30 年度共創学部推薦入試合格者 13 名に連絡をし,そのうちの 10 名（女性 9 名・男性 1 名）と場所・時間を調整の上で，1 時間程度の半構造インタビュー調査を行った。実施期間は 2018 年 7 月 25 日から 8 月 8 日までである。質問項目は名古屋大学において推薦入試合格者のインタビューを実施した風間（2013）を参考に作成した。共創学部の入試情報をいつ，どのように知ったのか，なぜ受験したのかなどの質問以外，高校などにおける指導と対策に特化した質問がある。また，AO 入試と推薦入試，もしくは AO 入試合格者（AO 組）と推薦入試合格者（推薦組）の違いなどについても質問した（質問の概要を参考資料に示す）。

表 1 平成 30 年度九州大学共創学部の入試の内容

	AO 入試	推薦入試	一般入試	国際型入試（帰国子女・私費外国人）
募集人員	20 人	10 人	65 人	10 人
志願者数	208 人	45 人	204 人	12+α 人
志望理由書	○	○	○	○
活動歴	○	○		
センター試験		○	○	
学力検査			○	○
小論文・レポート	○		○	
集団討論	○			
面接・プレゼンテーション	○	○		○
選抜期日	一次：10 月上旬 二次：11 月上旬	一次：12 月上旬 二次：1 月下旬	2 月下旬	2 月中旬 ～3 月上旬

注：国際型入試の志願者数は，公表人数の合計である。

5 結果

5.1 推薦入試合格者の特徴

推薦入試の合格者の特徴を「なぜ共創学部を受験しましたか」,「なぜ自分が合格したと思いますか」,「(両方を受験した者に対して) 推薦入試と AO 入試との違い」,「(推薦入試のみを受験した者に対して) 推薦組と AO 組との違い」などの質問から浮かび上がらせる (表 2)。

表 2 から推薦入試合格者の特徴として以下の二点を読み取ることができる。一つ目の特徴は, 合格者が高校生活において, 学業以外にも, 何らかの活動に取り込んできたことである。これらの活動の内容は, 課題研究, 部活, ボランティア活動への参加／受賞, 資格の取得, 海外留学／研修, 国内各種プログラムなどである。さらに, ほとんどの合格者が複数の活動に取り込んでいたことがわかった。二つ目の特徴は, コミュニケーション能力が高く, 中心的な存在である AO 組と違って, 推薦組はしっかり考える人が多いという点である。

5.2 高校における指導と対策

高校における推薦入試のための指導と対策を把握するため,「書類の指導と対策はいつからですか」,「(書類は) どなたから, どのように指導されましたか」,「プレゼンテーション＆面接の指導と対策はいつからですか」,「(プレゼンテーション＆面接は) どなたから, どのように指導されましたか」などの質問をした。その結果, ほとんどの高校において, 丁寧な指導と対策が行われていたことが分かった。以下では高校の所在(県外, 県内) 及び合格者の AO 入試への併願の有無を配慮し, 四つの事例から高校において、各時期で行われている指導と対策の具体的な様子を記述する。

事例 1 (県外高校出身, 推薦入試を受験した A さん)

A さんは 8 月のオープンキャンパス後に自ら志望理由書を書いた。担任の先生が志望理由書を見て,「漠然としているので, もっと具体的に書くこと」と助言した。

A さんは 10 月に入り, 担任の先生を含む 3 名の先生のコメントに基づき, 志望理由書を数十枚書き, 締め切りの直前に提出した。

12 月の一次合格通知が届いた後に, A さんは毎日放課後の 2 時間を使い, プレゼンの原稿 (A4 サイズ一枚) の準備に取り掛かった。担任, 国語の先生から受けた「これまでの学び (語学研修, 震災ボランティアなど) は良かったが, これからの学びを具体的に書く」というアドバイスに基づき, 共創学部の四つのエリア (人間・生命エリア, 人と社会エリア, 国家と知識エリア, 地球・環境エリア) に合わせて,「災害時における滞日外国人への支援のあり方」というプレゼンの原稿を書き続けた。また, 地学の先生から, 観光庁・法務省のホームページでの情報収集の方法や原稿のまとめ方などについて教えてもらった。

センター試験の後に, 教頭先生も含め, 計 10 名の先生が A さんの完成した原稿についてアドバイスしたり, 質問したりしていた。

A さんはインタビューの中で「他の受講者のプレゼンテーション資料を見たら, 自分のものが一番よいと思った。先生たちに感謝, 感謝」と振り返っていた。

事例 2 (県内高校出身, 推薦入試を受験した C さん)

8 月後半から C さんは毎日担任の先生に志望理由書について相談していた。最初は何を書けばよいのかは分からなかったが, 相談しているうちに, 少しずつ書きたいことが明確になってきた。C さんは毎日朝もしくは昼に, 担任の先生に志望理由書を提出し, その日の夕方に, 先生から返却された志望理由書のコメントに基づき, 修正し続けた。

センター試験の後から 1 週間ほど, C さんは英語と国語の先生から指導を受け, プレゼンテーションの原稿を見直し, プレゼンテーションの練習を行った。本番までの毎日, C さんの先生 (違った学年, 面識のない先生を含む) 計 10 名が面接官を演じ, C さんの面接の練習に付き合った。

C さんはインタビューの際に,「準備した面接は役に立った。違った先生が違った観点から, 質問をしてきたから, 私の考えるスピードや答えるスピードが早くなった」と語った。

事例 3 (県外高校出身, AO 入試と推薦入試の両方を受験した F さん)

・AO 入試対策

夏休始めから F さんは週二回のペースでオンライン塾での小論文の対策を始めた。

9 月に入ってから, F さんは志望理由書を書き, 担任の先生と進路指導の先生から「アピールが足りない。自分が共創学部に向いていることをきちんと書く」というアドバイスをもらったため, 5, 6 回修正した。その後, 国語の先生から小論文の添削を 2, 3 回ほど受けた。

・推薦入試対策

10 月に, F さんは担任の先生と進路指導の先生か

らアドバイスをもらい，AO 入試の際に提出した志望理由書を修正した。

センター試験の後，F さんは大まかなプレゼンテーションの資料を作成，担任の先生と進路指導の先生に見せたところ，「英語で発表したほうがいい」，「県庁ではなく，もっと大規模なこと（国連とか）を書く」と怒られた。先生たちのアドバイスを踏まえ，F さんは 3，4 回プレゼンの資料を修正した。また，F さんは英語の原稿を外国人の先生にも見せ，4 回ほど修正した。

事例 4（県内高校出身　AO 入試と推薦入試の両方を受験した I さん）

・AO 入試対策

I さんは 7 月に先輩からアドバイス（例えば，共創学部の先生の名前を出したほうがよい）をもらい，志望理由書をまとめた。

夏休み明け，担任の先生に相談したところ，担任の先生から「志望理由書に，今の自分と将来の自分とのつながりは書いたが，九州大学とのつながりはなかった」と指摘された。その後，担任の先生が共創学部のアドミッションポリシーを熟読し，「国際化」，「多角な思考力」などの 4 本柱で書くようにと I さんを指導した。それを受け，I さんは 8 回ほど志望理由書を修正した。

9 月に I さんは英語，数学，化学の 3 教科の先生による面接の練習を，計 5 回ほど行った。それと同時に，I さんは文系／理系を担当する先生の模擬授業及びディスカッションに 2 回ずつ参加した。小論文の対策に関して，文系／理系の二人の先生が計 4 回ほど課題を出し，添削を行った。

・推薦入試対策

AO 入試の後，I さんは AO 入試で提出した志望理由書を 10 回ほど修正し，担任と生物の 2 名の先生に

表 2 推薦入試の合格者の特徴を明らかにするための質問項目とその回答

質問	回答例
なぜ共創学部を受験しましたか	A さん：海外研修，地震ボランティアなどの経験があるため，防災について勉強したい。
	F さん：SGH 課題研究をやってきたため，社会問題に興味を持つようになった。
	H さん：英語は得意である。
	I さん：トビタテに参加した際に，一つの学問では問題を解決できないことに気づいた。「○塾」に参加し，九大の先生（一人が共創学部の先生）がリーダーだったから。
なぜ自分が合格したと思いますか	B さん：部活について話し合った。
	C さん：英語は○○点だった。それをプレゼン中に PR したら，先生たちが驚いていた。
	F さん：共創学部のコンセプトに合わせてプレゼン資料を作った。英語・課題研究も全面に PR した。
	G さん：一次の書類が独特だから，例えばビジネス○○検定，情報○○検定などがあった。実家が○○資料館だから，補助活動などいろいろやってきた。
	H さん：トビタテ留学経験があった。
	J さん：SGH での活動を PR した。
推薦入試と AO 入試との違い（試験の内容）	B さん：AO 入試か推薦入試かどちらかと高校の先生に言われた。しかし，AO 入試のディスカッションはまだ経験したことがない。推薦入試なら今までやってきたことをプレゼンするから，推薦入試を選んだ。
	D さん：AO 入試は不安要素が多い。例えば面接は臨機応変的に対応しないといけない。レポートも短時間では書けない。
	F さん：AO 入試はやること/準備することが多かった。書類もあって，授業もあった。推薦入試は今までやってきたことを伝えただけ，やりやすかった。
	G さん：今までやってきたことをアピールしやすいから。自分が推薦に向いている。AO 入試では緊張し，言いたいことを言えないまま終わった。準備した問題は答えたが，その場で考える質問はちょっと難しかった。
	I さん：AO 入試の時は，誰にも聞けるような質問ばかりで，他の人との差がつけられなかった。推薦入試の面接の質問は，具体的，つっこまれた質問で，私のための質問だったため，答えられた。
	J さん：推薦入試の時に，先生がよく聞いてくれた。ワークショップについて語り合った。
推薦組と AO 組との違い（学生の質）	A さん：推薦入試の生徒は何かしら，考えるか，悩んでいるか（考えすぎて眠れない人もいる）。
	B さん：AO 組は積極性がすごく，発言力があり，（共創学部の前身である）21 世紀プログラムの生徒と似ている。推薦組はしっかり考える人が多い。
	C さん：AO 組はアクティブで，発言が多い。先輩とのつながりも多い。彼らはいつも発信源となっている。AO 組は周りの人を巻き込む力がすごい。
	F さん：AO 組は目立っている。中心的な感じがする。推薦組は自己主張できない，ついていくタイプと思う。
その他の質問	E さん：ピアノの賞状をたくさん集めた。

添削してもらった。

12 月に入り，I さんは勉強の合間に，担任と生物の 2 名の先生に呼ばれプレゼンと面接対策を受けた。その際の，先生たちのアドバイスとしては，「ストーリー性を大事にすること」，「これまでの経験とこれからやりたいこと，そしてなぜ九大，なぜ共創学部という一連の流れを作ること」などであった。

以上，高校における指導と対策の事例を四つ（A さん，C さん，F さん，I さん）挙げた。それ以外の推薦入試合格者も多数の先生から情報とアドバイスを提供してもらい，面接＆プレゼンテーションの模擬練習に付き合ってもらっていた。

例えば，B さんの担任は予備校の情報（共創学部 AO 入試の面接の質問など）を収集し，B さんに提供した。B さんのプレゼンテーション＆面接の練習は担任の先生の他，歴史，物理，数学，英語などの先生も関わっていた。

また，AO 入試と推薦入試両方を受験した G さんは国語，社会の先生から志望理由書の添削を 12 回受け，模擬面接は図書館の先生や普段関わらない先生まで 12 名から，計 20 数回を受けた。その際，教頭先生や担任の先生は時事ニュースを探したり，毎回違った質問を考えたりしていた。

H さんもセンター試験の後，毎日放課後の 3，4 時間を使い，担任，英語，数学，社会，空いている先生から模擬面接を受けていた。

5.3 合格者及び高校からの評価

推薦入試に対して，合格者や高校の先生からの評価を見てみる。結論から言うと，推薦入試は必要な入試と考えられ，概ねポジティブに評価されていた。その理由は以下の三点にある。

まず，推薦入試は共創学部に受かるチャンスを一回増やせるという利点があげられる。この点に関しては，高校の先生や合格者の語りからも，合格者の受験パターンからも確認できる。例えば，「予備校の先生がチャンスを一回増やせるからと言い，私に推薦入試を進めた」（E さん），「一般入試で共創学部に入りたかったが，先生から 2 回のチャンスがあるから，推薦入試もと助言された」（H さん），「AO，推薦入試を含め，3 回のチャンスがあったから，共創学部の受験を決めた」（J さん）などであった。また，推薦入試合格者 10 名のうち，半分の 5 名が AO と推薦の両方の入試を受けていた。

次に，一般入試や AO 入試と異なる生徒を共創学部に合格させることができるメリットがある。インタビューの中で，「（母に言われ）性格的に推薦入試にあっている」（A さん），「AO 入試のディスカッションは今まで経験したことがない。推薦入試は今までやってきたことをプレゼンするから，推薦入試を選んだ」（B さん），「センター試験はちょっと自信がない（活動歴が豊富）」と発言した合格者が複数いた。

最後に，合格者のほとんどが推薦入試に対して「雰囲気が良かった」，「楽しかった」と評価している（表 3）。言い換えれば，満足の高い入試であると認識されている。

6 まとめと今後の課題

本論文ではまず，九州大学共創学部の推薦入試合格者の特徴を明らかにした。合格者が高校生活の中で，勉学以外，何らかの活動に取り組んできたことが大きな特徴である。さらに，しっかり考える人が多いことも推薦入試合格者の特徴の一つである。「課外活動などの経験がある」「しっかり考える」などの特徴は，名古屋大学文学部（風間，2013）や筑波大学（松井，2017）などの推薦入試合格者でも共通していた。

また，推薦入試合格者の出身校における指導と対策の実態の一端を把握できた。まず，ほとんどの高校では，担任，進路指導の教員，各教科の教員が中心になって，生徒指導を行われているが，高校によって，

表 3　推薦入試の雰囲気が良かった，楽しかったとの回答例

A さん：面接は楽しかった。先生たちの「ラフで行こうぜ」という雰囲気も良かった。
B さん：面接の前半は一般的な質問だったが，後半から変わった質問が出された。先生たちも面接を楽しんだと思う。部活の話をしたため，やりきった感がある。緊張せず，笑いながら話した。
C さん：いくらでも話せる雰囲気だった。
D さん：先生たちの質問は面白い。面接官が私のやってきたことに興味を示し，聞いてくれて，嬉しい。
F さん：課題研究，自分のやってきたことを中心に聞かれた。雰囲気がよかった。
G さん：AO 入試より推薦入試の方が言いたいことを言えた。今までやってきたことをアピールしやすかったから。
H さん：面接の感じがしない。先生との座談会みたい。プレゼンの内容についてみんなで一緒に考える雰囲気だった。
I さん：私のための質問，突っ込まれた質問，答えられた。
J さん：ワークショップについて語り合った。楽しかった。

教頭，校長，さらに，面識のない教員も関わっていることがわかった。次に，推薦入試の指導時期は 9 月から 1 月までに集中するということも明らかにした。この時期は，普段の業務に，センター試験の対策なども加わり，高校の先生にとって最も忙しく，大変な時期である。この時期に，さらに AO 入試や推薦入試の指導と対策の時間を追加すると，高校の先生にとってかなりの負担であると想像できる。最後に，指導内容と方法に関しては，情報の提供（ホームページの調べ方），提出書類への助言（描き方，流れ，まとめ方など），面接・プレゼンテーションの模擬練習などが行われていることがわかった。以上より，高校によっては，入試のかなり前から学校全体できめ細やかな指導を行っているという実態が明らかになった。

推薦入試への評価について，合格者や高校の先生は概ねポジティブに評価していた。その理由は共創学部に受かるチャンスを増やせること，一般入試や AO 入試と異なる生徒が合格できること，入試自体の「雰囲気が良かった」,「楽しかった」ことなどである。このように，推薦入試に対する評価について先行研究で指摘した教育効果以外に，受験チャンスの増加，楽しかったなどの評価も明らかになった。

最後に本稿の課題を二つ述べる。第一に，事例の少なさと偏りである。共創学部の入試が一度しか実施されていない時点でインタビュー調査を行ったため，事例が少ない。さらに，AO 入試との比較について，AO 入試が不合格で推薦入試に合格した人が対象であるため，AO 入試を過度に望ましいものとして評価している可能性がある。そのため，調査を継続して行っていく必要がある。

第二に，推薦入試の指導と対策に関して，高校での様子を中心にまとめた。しかし，指導と対策を行うのは，高校だけではなく，塾（オンラインも含めて）や予備校などでも行われている。実際に今回のインタビューでも，予備校の指導で合格した者もいたが，少数であったため，詳細な分析を行わなかった。今後は高校以外での指導と対策についても検証が必要であろう。

謝辞

研究の実施にあたり，インタビューに協力していただいた共創学部推薦入試合格者の皆さん，さらに貴重なご助言をくださった共創学部の教職員の方々に深謝いたします。

注

1) 本論文の作成にあたって，第 1 著者はインタビュー調査の実施ならびに本文の執筆を，第 2 著者は計画立案・全体監修・考察を分担した。

参考文献

大谷奨 (2009).「進学重視校における進路指導と推薦 /AO 入試―A 県県立高校の『進路指導資料』を手がかりとして―」『大学入試研究ジャーナル』**21**，1-6.

風間直樹 (2013).「推薦入試の改善に向けて」『名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報』**7**，17-30.

松井亨 (2017).「多様化する大学入試 ―筑波大学での事例―」『化学と教育』65 巻 7 号，326-329.

九州大学 (2017).『入学者選抜概要 －平成 30 年度－』九州大学

九州大学共創学部 (2019). 共創学部パンフレット（2019 年）<http://kyoso.kyushu-u.ac.jp/cms/wp-content/uploads/2018/06/19kyudailerflet_.pdf>（2019 年 8 月 30 日）

参考資料

インタビューの項目

Ⅰ　共創学部について
①いつ，どのように共創学部のことを知りましたか。
②なぜ共創学部を受験しましたか。
Ⅱ　書類（志望理由書&活動報告書）の指導と対策について
③書類の対策はいつからですか？
④どなたから，どのように指導されましたか。
⑤困ったことがあれば教えてください。
Ⅲ　プレゼン&面接の指導と対策について
⑥対策はいつからですか？
⑦どなたから，どのように指導されましたか。
⑧困ったことがあれば教えてください。
Ⅳ　その他
⑨なぜ合格したと思いますか？
⑩推薦入試の改善点などについて教えてください。